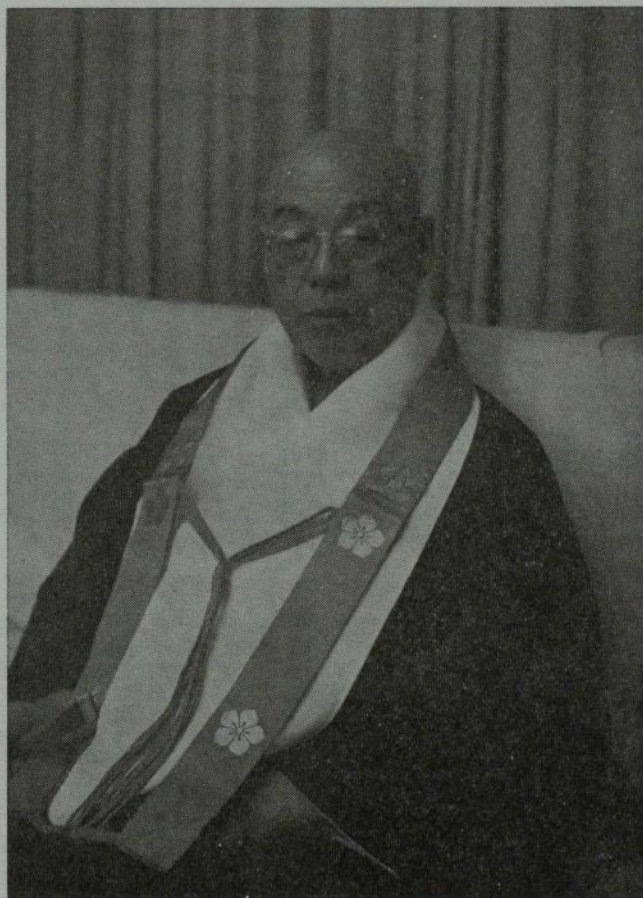


NO 171

全 仏

10/46

かつて十年ひと昔という言葉をも母から聞かされたことを思い出す。この度ちょうど十年目でまたわが本山にまいりました私はお蔭さまで賑々しくあった本山の面目あらたなさまを且つは喜び且は嬉しく思っている。外国の人は一世期などと世の代りを一百年と気の長いことを考えているでしょうか、まさかそうでもありませんが、日本人は気が短かい



(真言宗智山派管長竹村教智祝下)

ら百年などとのんびりしてはいない。十年すれば世代はすっかり代ってしまおうというた私どもの祖先は偉らいと思う。げに十年はおるか五年と経たないうちに根こそぎ代るこの転歩の早い現代に私どもは対処せねばならない。私は一陽生ずるこの十一月ここに晋山いたしました。来復の来秋を待たずに道の長ぜんこを念ずる。久方振りて再び誼を厚く出来ます全仏の皆さま方ともあらたな相慶を念じて息まない。

「生命科学と仏教」

の会合に出席して

玉城 康 四郎

(東大教授)



はしがき

わたしは自然科学に対しては素人であり、何の知識も持ち合わせていないが、それに対する関心だけは旺盛のつもりでいる。その理由は、仏教の内部的な必然性にかかっていると考えている。いうまでもないことだが、仏教の学問はただ道理やその思想を理解するだけでは不十分であり、どうしてもその背後の（実は自分自身の背後なのだが）ダンマ（法）そのものの世界を味得していかねばならない。それが仏道の第一段の目当てなのである。

ところが、それを人間社会のなかで表現し実現していく第二段の問題になると、どうしても道理が欲しくなる。従来の仏教思想はまさにそのようなものであった。ところで現代人は現代の道理の感覚を持っている。ことに近代化された国々においてその感覚はいっそう顕著である。西洋哲学は東洋思想と並称されるものではあるが、現代の日本人は、東洋思想に道理感覚のふるさとを覚えると同時に、西洋思想に道理の近代性を共感している。したがって、現代社会で仏教の社会的表現を考えていく場合に、西洋哲学を学ぶことは重要な意味を持っている。それとともに、西洋哲学と同一の基盤を有する自然科学は、道理の近代性をもっとも普遍的・機械的ながらたて実現され、また実現

されつつある学問である。したがって、この問題に関して、もはや自然科学を無視することは許されない。

会合の意味

箱根の会合は、「生命科学と仏教」という主題である。集まったのは、自然科学者・仏教学者・宗教学者・宗教哲学者・心理学者など、十数名の小人数である。それぞれの見解と問題を念頭において参加したにちがいないと思うが、これを内部から抽象して考えてみると、わたしは三つの普遍性が会合し討論し、ぶつかり合い、そして解決の道を模索したと思っている。その三つというのは、生命に関する三方面である。

第一は、この会合の主題たる生命科学である。自然科学者の追求する生命である。それは科学の性質上、普遍的ならざるを得ない。第二は、一般人が実感し意識している生命である。ごく常識的な自己意識から哲学的なそれを含めて、自分を自分と意識する自己の生命である。万人みな生命を惜しむ以上、これまた普遍的であることはいうまでもない。仏教もまたこうした普遍的な生命を問題にしている。第三は、仏教の目当てとする絶対生命、ブッダの生命、ダンマそのものである。仏教の立場からいえば、これがその究極の実在であり、一切の衆生がついにはそこに帰着せねばならない究極の普遍性である。

以上、三つの普遍性がいかに交流し合うかということが、この会合の目的であったと考えられる。第三の

絶対生命の普遍性を主張するのみでは、社会的表現の側面が欠落してしまうし、第一の自然科学の追求する生命だけが強調されると、一般人が共通して抱いているわれわれ自身の生命がおびやかされないとも限らない。こうした意味で、この会合は現代のかかえている仏教と自然科学の根本問題に触れるものであった。

まず基調講演として、自然科学の方から、江上不二夫氏「自然科学的生命観」、千谷七郎氏「自然哲学的生命観——意識と生命——」、仏教の方から西義雄氏「仏教の生命観」がそれぞれ試みられた後に自由討論に移った。ここで興味あることは、二人の科学者からそれぞれ違った生命観が示されたことである。生命の科学的追求の際に、自然科学であるからといって、すべての科学者が同じ生命観を持たねばならぬということはない。科学のなかでも、生命に対するさまざまな側面のあることはいうまでもなからう。ただここで問題になるのは、二つの違った生命観に対して、一般人の有する自己意識という生命、あるいは仏教の理解してきた一般的生命ないしその目当てとする絶対生命が、どのように対応するかということである。

第一の問題

科学的追求における第一の生命観は、およそつぎのごとくである。これまでは生物学という学問があった。それは、動物学や植物学に発するものであるが、その特徴は複雑性と多様性にある。たとえば、牛と馬は異なる、梅と桜とは異なる、というように。したがってこの学問では生命そのものは問題にしていない。そこで生命そのものを追求するのが生命科学である。この場合の特徴は、もっとも簡単な生命から始めて、だんだん複雑な生命に進み、最後には人間に近接しようとするものである。たとえば、生物の運動として、おどぎ草とアミューバーの運動には共通なものがある。生命科学は、まずその共通性を明かにしよう

とするのである。

そうすると、単細胞が生命の基本的性格であるということになる。その細胞の性質は、イギリスのホールデンがいったように、「常態的・特殊の構造の積極的保持」(Active maintenance of normal and specific structure)である。積極的保持というのは、つねに修理しながら生命を保持するということであり、常態的・特殊の構造というのは、食物を摂取して食物とは異なる自分の体に変化させる構造であり、いいかえれば情報の伝達発現である。これは要するに遺伝子の問題であり、その本体はDNAであり、一つの秩序にしたがったAGCTの組み合わせが二重螺旋を描いているという。

以上が自然科学における第一の生命観である。それは、もっとも単純な細胞の生命を問題にしている。これに対して仏教の生命観はどのように対応するであろうか。そのなかには、一般人に共通の生命観と、絶対生命の自覚としての生命観とがある。この二つのなかで、まず前者が対応しなければならぬ。仏教では、一般人共通の生命観として、いのち・暖かさ・意識(寿・煥・識)の合一したものを生命と考えている。その生命は、現実世界では父と母の交わりによって胎内に宿る所から始まる。それが自己が自己となる基盤である。しかるに、右の科学的追求では、それ以前の精子・卵子にまでさかのぼる。また、われわれの体は、無数の細胞から成り立っている。その一つ一つが一個の生命であることを科学は確かめている。しかるに、一般人の生命観は、自己の全体が一個の生命であり、その生命の生死が問題となっている。

この場合において、この二つの生命観の相違が明らかになったことは大きな収穫である。この相違はどこにもとづいているのか、またどのように調和されるのか、これを討論していくことが、今後の重要な課題と

なるであろう。

第二の問題

科学における第二の生命観は、前の場合とはまさに対照的である。それは一般人の生命観よりもさらに包括的なものである。植物なしには動物も人間も存在し得ないという点に注目すると、有機的生命が考えられねばならない。しかし宇宙は有機的生命だけではない。地水火風という無機的生命にまで拡張しなければ、宇宙の回路に生命を吹きこむことはできない。すなわちここで問われているのは宇宙生命である。

では、そのような生命に注目するにはいかにすべきか。それは体験過程を注視することである。体験過程は生きる過程であり、意識をも包括している。意識とは、そのような過程が稲妻のように括弧される時点にすぎない。ルドヴィヒ・クラークスは、肉体・心・精神を設定しており、それは並列的ではなく、たがいにつらなり合っているという。肉体は心の現象であり、心は肉体の意味である。その心こそ体験過程を観得する(Schauein)ものである。感覚はたんに近接したもののだけと結びつくが、心は遠い領域までも観得する。たとえば、鶴は数千斤を飛んでいくし、渡り鳥は季節と結びついている。これは、無意識なるものの認知であり、拡大された確実性を有している。いわば、思考なしに行なわれる反応の原理であり、宇宙的秩序の担い手である。この原理は、もとより人間自身にも及んでいるし、植物もまた観得作用を持っている。植物には意識がないばかりか、感知能力もないが、しかし動物以上に宇宙に織りこまれなければ死滅してしまうのである。

以上は、自然科学における第二の生命観である。これに対応する仏教の生命観は、その目当てとする絶対生命であろう。それは、いわば宇宙生命とも名づけられよう。しかし科学の追求する宇宙生命とはどのよう

に異なるであろうか。両者が基本的に相違する態度は、仏教が宇宙生命を主体的に体得しようとしているのに対して、科学では、個々の生命の観得作用から宇宙生命を類推したものである。仏教の主体性に対して、科学の対象性・客体性がまず基本的な相違点である。しかし、観得作用そのものは主体的である。その主体性を観察し考察するのは容体的である。同様に、仏教の絶対生命も、たんに主体的把握にとどまるのではなく、その理解・表現は展開しない。それを考察して、その生命の意味・仕組みを明かにしていかなばならない。その考察の資料として、科学の提供する動物や人間の観得作用が重要な参考の役目を果たすであろう。

むすび

今回の箱根の会合は、以上述べた二つの点で大きな成果を挙げたといわねばならない。すなわち、第一は、科学の追求する単一生命と一般人の有する生命観(仏教もまたそれを問題にする)とが相違するという点が明かになったことであり、第二に、科学の目指す宇宙生命と仏教の絶対生命とは、主体性と客体性として基本態度において相違するが、しかし今後は相補的に考察を合うことによって、仏教の絶対生命もより多く現代人に理解され得る形となるであろうし、科学の宇宙生命も、さらに仏教より示唆を受け得るであろう。また、科学における第一の生命観と第二のそれとはまったく対照的で、両者は関係がないごとくに見えなが、しかし、第一の生命観においても、個々の生命は、「閉じられた機構」(Closed system)では生きることができず、「開かれた機構」(Open system)において初めて生存が可能であるという点から見れば、生命は宇宙に繋がっているといえる。したがってこの点では、生命観の第一と第二とは、まったく無関係とはいえない。今後は、こうした問題を検討していくことが重要な課題となるであろう。

第十九回全日本仏教徒大会

全仏教徒の総結集

「みほとけのほと、みんなで手をつなごう」の大会スローガンをもちて第十九回全日本仏教徒会議四国大会は十月七、八日の二日間を会期として高松市市尾会館を主会場として開催された。八十八霊場をもつ仏教信仰のメッカともいえる地方であり、全仏大会がはじめて海を渡った意義ある大会は約二千五百名の仏教徒が全国から参加した。

大会第一日は高松市民会館で午前九時四十分に桜井全仏組織局長の開会宣言により開式、逢坂地元会長の導師で全員が三帰依文を唱和し、大谷光昭全仏会長、稲田稔界全仏理事長、逢坂恵照大会々々長の挨拶があり、来賓として特にV・H・クエリオ駐日インド大使夫妻、P・C・

タクル駐日ネパール大使よりメッセージがよせられた。ことに東パキスタン難民の救援金が加者よりカンパされ約三十万円の浄財があつめられた。なを第一日、二日の大会各分科会等の詳細は次号に掲載の予定である。

「仏陀の教と心のめざめを」

駐日インド大使

V・H・クエリオ閣下

私共夫妻が、本日このように盛大な全日本仏教徒会議四国大会に列席できました事を、誠に光栄に存じます。

我々は、全日本仏教が、世界の仏教徒の人々と友情と協力を促進されましたことを賞讃いたします。

また仏教を媒介として世界各国の文化交流を深め、国際的分野にも尽力されている事もよく存じています。

インドと日本は特に釈尊の教えと哲理を通じてお互に密接な関係にあります。

一九五五年の比叡山での第四回大会に出席し、その後一九六二年、六五年、六八年の大会にも出席しました。

また、インドでのブッタジャヤンテを祝った時、日本の代表が我国に來られ故ネール首相に逢われた事を思い出します。さらに一九五七年故ネール首相が日本を訪問した時、全日本仏教が歓迎の会を開いて下さったことも忘れられません。

また二国間の友情のシンボルであるブタガヤのストッパーの建設にも援助がありました。

このような日本とのきづなを通して両国間の関係は深く、今後国際的活動のあらゆる分野において協力しあえる時が来ることを期待しています。しかし、この事は容易なことではありません。それを容易にすることがあるとすれば、それは今迄につくられた両国間の古い文化的なきづなでありましょう、そこにこそあながたがたの果す重要な役割があるのです。

それは、インドと日本の友好の真隨にある歴史的な基盤をより強固にすることであり、皆さんの宗教心、欲を離れた気高い動機であります。

皆さんの取られている国際問題へのアプローチは国内的にも国際的にも、この混乱した現代社会には特に重要であります。平和と寛容の釈尊の教えは常に歴史を直してみられるように、現代にも生きております。

ベトナム、中近東、バングラデシーにおいても問題は同じで、権力を得ようと

し、保持しようとする戦いが人命を無視して行なわれております。

インドでは現在八百万を越すバングラデシーからの難民がおります。これは莫大な数で、およそ東京の人口にも相当します。難民は、わずか五カ月の間に着るものも、食べるものもなく流れこんで来ました。

ウタント国連事務総長は人類の歴史上最も悲惨なことのひとつとして難民問題を採り上げました。

彼等は恐しい戦争という機械の犠牲者であり、基本的人権と基本的自由を無慈愍にも否定する指導者達の犠牲者であります。

パキスタンの現在の指導者達の無意味な非人間的な政策が、世論の圧力により好転することを期待しています。

皆さんの団体が、この国の人々の良心を目ざめさせ、勇気づけるのに役立つことと思えます。しかしながらまだ多くの成すべきことがあります。皆さんの同胞を目ざめさせ、皆さんの関係のある世界の国々の機関にも働きかけなければなりません。

最近、インド難民キャンプを訪れた米国上院議員エドワードケネディはこの重責はインドだけのためではなく、国際社会によって生みだされたものだ。この問題が解決されるのは程遠いであろうが、広く世界の人々の注目を受けつきたいといいました。このバングラデシーからの難民の流入に対して、インドが受ける

莫大な経済的負担を御理解いただき、皆さんの御協力を切に願っておりますが、本日のこの会場でそのための救済活動がもはや始まっていることに心から感謝いたします。

最後に、この大会が成功のうちに終了することを念じて止みません。

「聖地ルンビニの復興」

駐日ネパール大使

P・C・タクル閣下

導師各位

私は全日本仏教会を通じ、ゴウタマ・ブツダの教の信者たちの、この高貴な集會に参加出来ることを心からうれしく思います。私たちネパールの民は、私たちの地、祝福されたその生誕地を心の安らぎとし、今日ここで導師の方々に祝辞を述べること非なる光栄とします。

世界の動勢は第二次世界大戦直後、国連による人権宣言公式化の偉業達成にもかかわらず、いまだ国々の間には局部的、断続的戦いが続き、憎悪されるべき人種差別、そして野卑な非人道的行為の渦に人道主義がさらされ、この憲章の像が打ち消されそうにも思われます。信者間においても政治的、社会的、経済的争い、そして世界平和を切望する沢山の声に反し、増大し続ける原子力兵器の生産貯蔵、ここに不寛容が大きな不満をもたらせ、私たちの生活へと広がってきています。やがて緊張状態は人々を激しい突端へと牽いていでしょう。そして他方にお

いては、伝統的徳徳、精神的価値観への弱視、新世代間の留まることを知らぬ秩序が生まれ続けています。今ここに私達は何を感思しているのでしょうか。私は断言します。ここに自らを救う場を見つけ得られることを。精神のおよび道徳的意味の再認識、そして補強なしにはいかなる科学技術産業能力の発展も、人々の生活に最大限の効力を発揮し得ないことは明らかです。故にともに望まれるものはふたたびブツダの教え、地球の兄弟愛に基づいて真の世界平和への路を見きわめる必要性です。そのために私たちはここに集い、協力を敬意を表しています。日本は目ざましい速さでその経済、産業ならびに技術発展を遂げ、世界で固有なすばらしい位置を獲得しました。そして今や世界の発展途上国へと、その経済援助を続けています。ここに私たち兄弟の路がともに開かれました。ブツダの教えをもって、より広い意味での全人類への救い、人道主義の質的改善は物質を無尽蔵に補い、残存のなすばらしい成果への確信をもたらせるでしょう。

一九六七年、国連ウ・タント事務総長のネパール訪問は今日に至った清らかな国王マヘンドラ・ピラ・ビクラム・シハハ・ターバはこの地への暖かくつつましい、そして尊厳な保護をヒマラヤの使命とし、その方向をしめし続けています。国連中央本部開発委員会発足により、総額六百万ドルと予定される資金調達の意図、日本万国博覧会での活動を通じ著名

な建築家丹下健三氏へのマスタープラン依頼等、前向きな協力が進められていきます。私は、今日この尊い機会を通じ全世界の献身的仏教信者、さらにはブツダの信条を育む多くの方々に、この開発への惜しみない支援を呼びかけたかと思えます。一億の人々を持つこの地日本の献身的博愛主義者達のヒマラヤの使命、ルンビニ開発への意欲ある活動、積極的援助、協力を願ってやみません。

終りに、我々のブツダ、ダルマとサンガの名のもとに全日本仏教会の発展と私達の連帯を祈り、真の調和、相互理解、人類の恒久的平和を求め、進み続けましょう。

インド流入の

東バキスタン難民を救おう

目下世界でもっとも注目をおつめているインド流入東バキスタン難民は約八百万人以上といわれ、ほとんど飢餓の状態にあり、まことに悲惨きわまりない有様を考へるとき、仏教徒として、また人道に照らすことが出来ないであろう。

全仏では、さきの第十九回全日本仏教徒会議四国大会の折に、V・H・コエリ才駐日インド大使に、取りあえず三十万円をおくり、さらに同会議第二部会において、これが救済活動について上提可決し、総会において満場一致議決された。それにもとづき、左記の要領で救済金の受付を取り扱うことになった。加盟国体内にとどまらず、広く一般からでも出来る限りの御協力をお願いしている。

- 一、締切期日 昭和四十六年十二月末日
- 二、金品の別 金のみとする。
- 三、送金方法 現金書留、振替口座（東京五九五四七）ほかいずれの方法でも結構
- 四、送金先 全日本仏教会国際局宛
東京都東区西浅草一
五一五

なお、締切後処理状況は本誌上に発表、報告することになっている。

ルンビニ復興の浄財第一号

川越市大谷派真行寺（住職武田慧照師）の経営するルンビニ幼稚園では、ルンビニ開発の尊い事業がはじまることを聞いて、さっそく園児や父兄、門徒の人々に呼びかけ、さる十一月二十六日に全仏へ六万三千五百円を持参、ぜひ役立ってほしいと全仏へと届けられた。

武田師はさきにインド仏蹟巡拝に参加され、さきの四国大会のときネパール大使の熱心な協力要請にこたえた第一号の献金で国際局でも非常によくこんでいる

世界高僧合同法会

韓国で開催

世界仏教連合本部（韓国、長老院長、李青暉）主催、ユネスコ韓国委員会後援による世界高僧合同大法会が、この十月三十一日から十一月六日まで、釜山・梵魚寺（禅剎大本山）を会場に開催された。

招請国は韓国のほか、日本、台湾、香港、ベトナム、印度、タイ等十三ヶ国で日本からは全仏新聞、柳師が出席した。

事務総局報告

財団法人全日本仏教会の寄付行為によつて、八月二十三日役員任期二カ年が満了となったが、従来慣行によつて、仏教徒大会が終了するまでその手続を延長しこのほど各加盟団体から評議員の推せんをもとめ、現会長から委嘱状が発せられた。

評議員会が召集され、理事長及び監事を評議員のうちから選出し、理事会とともに会長、副会長を推挙する。評議員会で選出した理事、監事は会長が委嘱する。理事は、理事会を開き、理事長、常務理事を選出し、評議員会とともに会長、副会長を推挙する。

理事会で選出した理事長、常務理事は会長が委嘱する。事務総局の職員は、すべて理事会で審議し、事務総長、局長は理事会で選定したものを会長が委嘱し、常勤の部長以下の職員は、理事会で議決したものを理事長が任命する。

役員任期は二年とされているが、職員の任期の定めはない。しかし従来慣行は、理事長任命の職員は理事長に、会長委嘱の職員は会長に、夫々退職する交書を提出している。

評議員の定数は百八十余名であるが、理事は四十名から五十名まで、約半数が常務理事に選出されている。監事は三名で、民法第五十九条の職務を行なうものである。

制度調査委員会の答申書の条項を、どのように実施に移されるか、役員会の動向が注目されている。

WF B青年会議に
代表派遣

来る十一月十九日より五日間にわたり国際仏教青年会議が、タイ国において開催される運びとなり、日本からも二名の正式代表が派遣される。このWF B青年会議の開催は、一九六九年マレーシアでの第九回WF B大会において決議されたものだが、諸般の事情により開催がのびのびになっていった。この程タイ仏教会とタイ仏教青年会の協力により具体化されたものである。参加は、WF B各国支部センターの仏青活動に従事している青年男女で、各国二名となつており本会からは、西本願寺派・石田博信氏(竜大・二十一歳)と東本願寺派・加藤正雄氏(神戸大・二十一歳)が正式代表として参加するほか、西本願寺派総務・日谷周暎氏がオブザーバーとして出席する。

会議は、総会のあと、
一、仏青活動強化について
二、人間関係問題について
三、道徳、仏教教育について
分科会をもち、活発なグループ討議とその成果が期待されている。

仏跡巡拝団参加を締切る

本会主催の仏跡巡拝団はこの程、三十名の参加者があり締切った。明年二月九日より二十五日まで、インド、ビルマ、ネパールの仏跡巡拝を実施する予定。

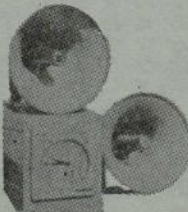
昭和四十七年版
仏教徒手帳
申込み受付中

全仏総務局では、来年度の仏教徒必携「全仏手帳」を十一月下旬に発行することになりました。お申込みは全仏総務局(東京都台東区西浅草一ノ五ノ五十一)まで。

内容については次の通り
体裁 縦十二、二cm×横八、二cm
表紙 特製合成皮革(黒)
内容 三篇依文、四弘誓願、六曜星刷込、宗門聖日、仏教徒の人間像、宗派・都道府県・仏・団体役員住所録、忌日・年忌早見表、各県宗教法人事務主管部局一覧、その他
定価 二五〇円、送料別実費

全日本仏教会御推奨

電気梵鐘



これは便利・費用は安く効力は抜群、座して天下の名鐘を聞く。幼稚園では、ベル又はチャイム使用可能

製作販売
東海電機株式会社
〒244 横浜市戸塚区矢部町1025番地
TEL (045) 861-3311代表

装置一式・トランペットホルン一基
金貳拾五万円也
(取付配線工事費は別途)

お寺に仏旗をかかげよう

大	たて 150C—よこ 247C	¥ 4,500円	小	70C—100C	¥ 1,400円
中	90C—135C	¥ 2,500円	手旗	35C—100C	¥ 300円

もめん 別染製 堅牢 (全日本仏教会制定意匠登録済)
各地区仏教会でまとめて御注文の際は価格の御相談に応じます。

財団法人 全日本仏教会

111 東京都台東区西浅草1—5—5 電話 03・843・6341~3

昭和四十七年十一月一日発行

発行人 尹 藤 吾 雄

編集人 白 番 意 右

発行所 財団法人 全日本仏教会